朝鮮時代の「甕器」について

－薩摩 堂平窯跡との比較を視座として－

片山まび

はじめに

朝鮮時代（1392 ～ 1910）のうち、朝鮮前期と称される 15 世紀から 16 世紀にかけて作られた陶磁器には、粉青沙器や白磁のほか、粘土で成形し、灰釉、鉄釉をかけた施釉陶器、いわゆる「甕器（*Onggi*）」がある。粉青沙器もしくは白磁と「甕器」は器種とそれに伴う用途を違えており、前者は碗や皿などの供膳具を、後者は壺・甕・片口などの貯蔵器や調理具を担った。さらには技術者集団も異なり、朝鮮王朝の様々な制度を定めた『経國大典』（1467 年成立）では、前者は「沙器匠」、後者は「甕匠」と区別して管理され、基本的には別系譜の技術者集団として認識されていたことがわかる。[i] なお「甕器」についての名称や定義については様々な議論があるものの、本稿では混乱を避けるため従来の論考において慣習的に用いられている「甕器」をカッコ付きで使うこととする。

豊臣秀吉の朝鮮侵略では、日本軍は慶尚南道を足がかりとし、主には全羅道や忠清道、京畿道など、南部地域を中心に軍を進めた。現在、韓国の「甕器」窯跡に対する発掘調査がもっとも進んでいる地域は、全羅南道と慶尚南道であり、薩摩焼と深い関わりのある島津軍の進路とも一致する地域が多い。あわせて最近の発掘の特色として、再開発に伴う広範囲の面積についての発掘が多く、窯跡のみならず、工房跡などの大規模な陶磁器生産体制が明らかとなりつつある。「甕器」に関する考古学研究は、2000 年代以後、窯跡発掘成果をまとめつつ発表が続けられているが[ii]、筆者はかねてより「甕器」の技術が薩摩や肥前などの淵源であることを指摘してきた。[iii]本稿においては、2012 年度に韓国で発表した成果をもとに[iv]、最新の窯跡の発掘成果を追加し、沖縄の初期施釉陶器の源流となる薩摩、堂平窯跡との相違点を概観し、両者の関係を考察するうえでの一助としたい。

Ⅰ．全羅南道地域の「甕器」窯跡

薩摩焼のルーツとしては全羅北道南原が言及されることが多いが、残念ながら南原、もしくはその周辺地域では地表調査を含めても朝鮮前期に相当する陶器窯址は発見されておらず、今後の成果が待たれる。[v] これに対して全羅南道域では「甕器」窯址の発掘が進んでおり、羅州、康津は島津軍の進路にも相当することから関連性が注目されよう。

(1) 全羅南道羅州牛山里窯跡（ナジュ　ウサンリ）[vi]

2 号窯が「甕器」窯であり、焚口と窯尻が失われ、焼成室の残長 8.6m、窯床幅 1.2 － 1.5m、窯床

かたやま・まび：(東京藝術大学　教授)

面角度 18 度、半地下式、土築無段単室傾斜窯が 1 基検出された（図 4 －①）。出土遺物は、灰釉のかかった甕・壺・筒型容器・片口・蓋・平鉢・瓶・甑・水注である（図 5 －(1)(2)(3)、1 ～ 5、24 ～ 27、58）。器壁は 5mm 前後と薄く、内面に同心円状の当具痕があり、外面のタタキはナデ消されている。目跡は立方体に成形した硅石目と貝目がある。窯道具は報告されていない。本窯は、1420 － 1450 年代頃の粉青窯に隣接しており、同じ頃の年代観が与えられる。

(2) 全羅南道康津月下里窯跡（カンジン　ウォルファリ）[vii]

焚口と窯尻が失われ、焼成室の残長 20.1m、窯床幅 1.4m、窯床面角度 12 度、半地下式、土築無段単室傾斜窯 1 基が検出された（図 4 －②）。遺物は、灰釉のかかった甕・壺・筒型容器・片口・蓋・平鉢・水注・瓶である（図 5－(1)(2)(3)、6 ～ 9、28 ～ 32、57）。器壁は 5mm 以下と薄く、内面に同心円状の当具痕があり、外面のタタキはナデ消されている。目跡は立方体に成形した硅石目（図 1）と貝目がある。硅石目は羅州・康津地域の甕器の特色である。窯道具は馬蹄形トチンが出土している。16 世紀後半～ 17 世紀前半の粉青・白磁窯、白磁工房と隣接しており、また白磁の製品が甕器片と混在して出土することから、同じ頃の年代観が与えられる。本窯で興味深い点は、甕器工房跡 6 基が発掘されたことである。工房跡は正方形の平面をなし、轆轤軸孔と排水溝を伴う（図 4 －③）。現在も甕器は地下に轆轤孔を彫り、座面より低い位置に轆轤を備えるが、それに通じるものであろう。白磁工房跡が磁土溜め、水簸、乾燥用のオンドル施設を備えることとは対照的であり、生産技術の異なる集団が近接し、いわば工場団地を形成していたことを示すきわめて重要な遺跡である。

図 1　硅石目（月下里窯跡）註vii、251 頁　図 38 より転載

(3) 全羅南道高興郡ソンギ里窯跡（コフン　ソンギリ）[viii]

焚口と窯尻が失われ、残長 12m、最大幅 1.35m、窯床面角度 10 度の無段単室傾斜窯 1 基が検出された（図 4 －②）。遺物は、緑褐釉のかかった壺・甕・小壺・蓋である。[ix]本窯は発掘事例のなかで唯一、素焼きがなされている。器壁は 5mm 以下と薄く、内面に同心円状の当具痕があり、外面のタタキはナデ消されている。目跡は貝目のみ、窯道具は馬蹄形のトチンが出土した。報告者は他窯の器種構成との比較から、15 世紀から 16 世紀頃の窯としている。

Ⅱ．慶尚南道地域の「甕器」窯跡

慶尚南道は日本軍が必ず経由した地域であるが、島津軍は泗川に倭城を置いた。この地域では、15 世紀から 16 世紀に相当する甕器窯が 3 か所で確認されている。

(1) 慶尚南道清道郡蓴池里窯跡（チョンド　スンジリ）[x]

焚口と窯尻が失われ、焼成室の残長 180m、窯床幅 1m、窯床角度 15 度、半地下式、無段単室傾斜

窯1基が検出された（図4－④）。出土遺物は灰釉のかかった甕・壺・片口・蓋・平鉢・瓶・甑である（図5－(1)(2)(3)、10～12、33、34、36、37、39～41、59、60）。器壁は5mm以下と薄く、内面に同心円状の当具痕があり、外面のタタキはナデ消されている。窯道具には馬蹄形トチン、目跡は貝目のみである。窯床から刷毛目粉青が出土したことから、15世紀後半～16世紀前半とされる。

(2) 慶尚南道機張郡下長安里窯跡（キジャン　ハジャンアンリ）[xi]

1号窯跡が甕器窯に相当し、焚口、窯尻が失われ、焼成室の残長13.2m、窯床幅1.64m、窯床面角度16度、半地下式、無段単室傾斜窯1基が検出された（図4－⑤）。そのほか刷毛目粉青、軟質白磁窯跡4基、竪穴住居跡、住居址が散在する。出土遺物は灰釉のかかった甕・壺・片口・蓋・平鉢・瓶・釜である（図5－(1)(2)(3)、13、14、35、38、61、62）。器壁は5mm以下と薄く、内面に同心円状の当具痕があり、外面のタタキはナデ消されている。窯道具は不明であり、目跡は貝目のみである。焼成室内部より甕器が集中して出土するが、窯道具や溶着痕がある遺物がなく、検討の余地を残している。刷毛目粉青や軟質白磁の窯とさほど年代が離れるものではなく、同じく15世紀後半から16世紀の年代観が与えられる。

(3) 慶尚南道泗川市牛川里窯跡（サチョン　ウチョンリ）[xii]

窯体は3基あったと思われるが、残存状態が悪く、焼成室の残長6m、幅2.2m、窯床角度不明、半地下式と思われる無段単室傾斜窯がわずかに確認できる程度にとどまる。出土遺物は、鉄釉がかけられた甕・壺・片口・蓋・平鉢・水注・瓶・甑・釜である（図5－(1)(2)(3)、15～19、42～46、63、65）器壁は5mm前後と薄く、内面に同心円状の当具痕があり、外面のタタキはナデ消されている。窯道具は馬蹄形トチンがあり、目跡は貝目のみ（図2）である。報告者は器種の多様さや他窯との比較から16世紀後半としている。

図2 貝目　牛川里窯跡

Ⅲ．鹿児島県苗代川堂平窯跡との比較

本来は「甕器」についての詳細な型式分類を述べる必要があるが、紙面が限られるため、本稿においては薩摩焼との比較を行いつつ詳述を行うことを許されたい。数多くの窯跡のうち、鹿児島県苗代川堂平窯跡は薩摩焼自体の初期様相を示す窯跡としてきわめて重要であり、また琉球との関係を考えるうえでも要となる。[xiii]本窯の詳細については渡辺芳郎氏の論考に譲ることとするが、本窯Ⅰa期は1620～30年代に相当し、「甕器」の影響が看取される遺物が出土するが、その後は日本化の傾向が強まるとされている。そこで本稿ではⅠa期に限って比較検討を行う。なお全羅南道は全南、慶尚南道は慶南と略称する。

1. 窯構造・窯道具・目跡の比較

窯構造：堂平窯跡は半地下式土築無段単室傾斜窯であり、全南、慶南のいずれの窯とも基本的な窯

材と構造が一致し、日本の窯構造とは異なることから、朝鮮からの技術伝播によるものとみられる。堂平窯、甕器窯の双方とも残存状態が良いとは言えず、一概に比較は難しいが、堂平窯跡の当初の窯床幅は1.4mであり、韓国の事例も1～1.6mと近しい。堂平窯の焚口は幅1.0m×1.5mの長方形をなしている。「甕器」窯の比較事例はないものの、コ・ジュニ氏は慶南地域の窯構造の変遷を考察するなかで、16世紀半ばから後半に相当する白磁窯の焚口構造が卵円形から長方形に変化すると述べており、似た様相を示す。[xiv]ただし事例が尚州好音里窯跡、しかも白磁窯1件にとどまり、焚口は同じく石列に囲まれた長方形の平面をなすが、1次面の規模が幅1.25m×長3.1mと堂平窯よりも大きいなど、検討の余地を残す。[xv]今後、資料が増えた段階での考察が必要である。

目跡：全南では貝目と硅石目を併用するが、慶南では貝目のみを使用しており、堂平窯でも貝目のみである。環境条件に左右されるため一概には言えないが、目跡は慶尚南道に近しいと言える。

窯道具：堂平窯跡出土の窯道具には、焼台（図3－①）と馬蹄形トチンがある。円盤形の焼台については、現在のところ慶南でしか確認されない（図3－②）。馬蹄形トチンは全南、慶南の双方で確認されており、両道と共通する。

以上、調査事例が限られるため断言は難しいものの、目跡や窯道具からすれば、堂平窯跡は慶南地方の甕器窯に近しい特色を持つと言えよう。

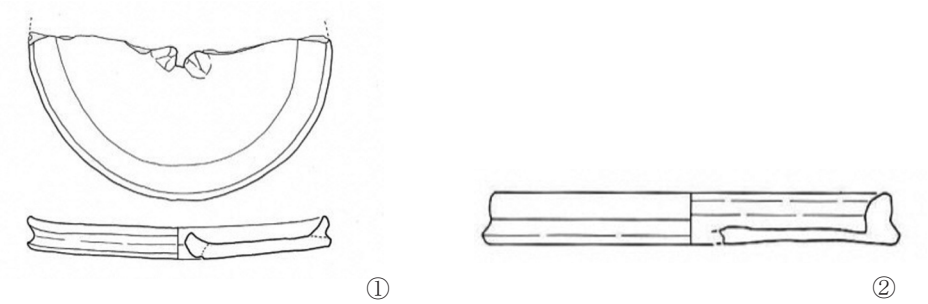


図3　焼台（①：専池里、②：堂平窯跡）

2. 製品の比較（図5）

製品の名称については、韓国語の固有名称表記が多いため、別途に類の名称を付した。

Ⅰ類：報告書で甕と称される器種を、仮にⅠ類とする。基本的には口径が26cm前後の大型製品を指す。型式は3種類があり、T字状口縁と短い頸部をなし肩から胴が大きく広がる型式（Ⅰ－1）、T字状口縁と短い頸部をなし卵形に近い胴を作る型式（Ⅰ－2）は全南・慶南とも共通しており、出土量も多く、主要な製品であったとみられる。このほか全南のみに見られる幅広い口縁をつくる型式（Ⅰ－3）、慶南のみに見られる頸部から胴が丸く膨らむ型式（Ⅰ―3）がある。堂平Ⅰa期にはⅠ―1類（図5－(1)、20）、Ⅰ―2類（図5－(1)、21）とも共通している。ただし前者は胴に波状の突帯装飾を施し、「甕器」窯跡の出土例とは異なる。16世紀末から17世紀初に相当する堺環濠都市遺跡（SKT701）第4次整地層からは、波状の突帯装飾を施したⅠ―1類に相当する陶器片が出土しており[xvi]、また同じく「甕器」の影響を色濃く受けたとみられる佐賀県唐津市皿屋上窯跡でも同様に波状の突帯装飾を施したⅠ―1類に相当する遺物が出土したことから[xvii]、この製品が本来的には作られていた可能性、もしくは日本で好まれた等の背景考察が必要である。Ⅰ―3類については、いずれも堂平窯跡では見られない。

Ⅱ類：報告書で壺と称される器種を、仮にⅡ類とする。Ⅱ類は、Ⅰ類よりも小型の製品である。T字状の口縁から頸部をはっきりと作る型式（Ⅱ－1）、T字状もしくは「く」字状の口縁から短い頸を作って丸い胴をなす型式（Ⅱ－2）がある。ただ全南では胴が大きく開く傾向にあり、慶南では口径と胴の最大径の比率は約1:1.5ほどと狭く、同一の系譜で論じることは難しい。堂平Ⅰa期の壺（図5－(1)、22）は慶南のⅡ－1類（図5－(1)、13）に近しい。なお堂平Ⅰa期には粘土紐製の縦状耳が取り付けられ（図5－(1)、23）、渡辺芳郎氏の論文では日本で好まれた茶壺をモデルとしたとされる。「甕器」にも消費地とはなるが蔚山パンギ里出土の縦耳付の器形があるが、異なるものであることがわかる（図5－(1)、参1）。全南Ⅱ－2・慶南Ⅱ—2類の類似例は、堂平窯跡にはないものの、先の皿屋上窯跡にはあり、窯跡には残されていない可能性がある。このほか「甕器」には法量が小さな小壺があるが、バリエーションが多いため、分類がきわめて難しく、また共通点も少ないため別稿に改めることとしたい。

Ⅲ類：報告書で筒形鉢（*Dongi*）と称される器種を、仮にⅢ類とする。口縁から底径に向かって狭まる形の鉢には直線状の胴（図5－(2)、24・28・33・42）、もしくは頸部でやや広がって狭まる型式（図5－(1)、34）があるが、数量が少ないため、本稿では一括して扱う。なお両耳については有無がある。堂平窯では、耳はないものの直線状の胴（図5－(2)、47）、頸部でやや広がって狭まる型式（図5－(2)、48）の二種類が見られ、「甕器」と共通している。

Ⅳ類：Ⅳ類はⅢ類よりも器高が低く、T字状の口縁から、ややくびれをつくって捏鉢形をなす器種である（図5－(2)、35・43）。調査事例では慶南でしか見られないが、堂平窯跡には存在し（図5－(2)、49）、共通する。また上部に円形の貼付装飾を施す点でも相通じている。

甑：底に大きな円形状の孔を穿つが、いずれも残りが悪い（図5－(2)、25・36）。堂平窯跡でも出土し（図5－(2)、50）、「甕器」と共通する器種であるが、現段階では淵源を限定することはできない。

片口：口縁に粘土板などで注口をつくるもので、全南、慶南ともに見られる。慶南では胴が曲線を描く型式（図5－(2)、37）と直線状の型式（図5－(2)、38）の二種類がある。堂平Ⅰa期には前者のみが存在し（図5－(2)、51・52）、共通する。しかし口縁は「甕器」では外側に折り曲げるのに対し、内部にたたむ型式となっている。

蓋：蓋はⅠ類、もしくはⅡ類に伴うもので、断面が台形をなして器高に高低があるもの（図5－(2)、26・27・30・31・39・40・45）のほか、鉢形（図5－(2)、32・41・46）もある。堂平窯跡では双方の型式が共通する（図5－(2)、55・56）。蓋については、同道域でも窯の個性がはっきりと現れる傾向にある。現状の資料では堂平窯跡と近しい型式の蓋は蓴池里跡の出土例である。

水注：注口が巻口をなし、把手をなす水注が全南、慶南とも出土する。全南ではく字形口縁（図5－(3)、57）、慶南ではT字状口縁（図5－(3)、63）をなし、堂平窯跡では後者と同じくT字状口縁をなす水注（図5－(3)、68）がある。渡辺芳郎氏は伝世品の「甕器」のなかに、同一の把手をつくる例を指摘している。[xviii]

瓶：窯跡での瓶の残りは悪く、消費地出土の資料を補う必要がある。全南での種類は不明であるが、慶南では頸の長い型式（図5－(3)、参2）、頸が短い卵形状の胴をなす型式（図5－(3)、参3）、頸が短く胴がややずんぐりとした型式（図5－(3)、参4）の3型式が見られる。このうち前者の2型式のみが堂平窯跡と共通している（図5－(3)、67・68）。

釜：楕円形の胴をなし、ツマミのある蓋を伴う釜は今のところ慶南のみで見られる（図5－(3)、61・62・65）が、堂平窯跡にはない。

以上、型式からしてⅢ類とⅣ類、蓋、水注など、堂平窯跡の製品は慶南地域に近しい特色がみられることがわかる。

3. 口縁成型方法の分類（図6）

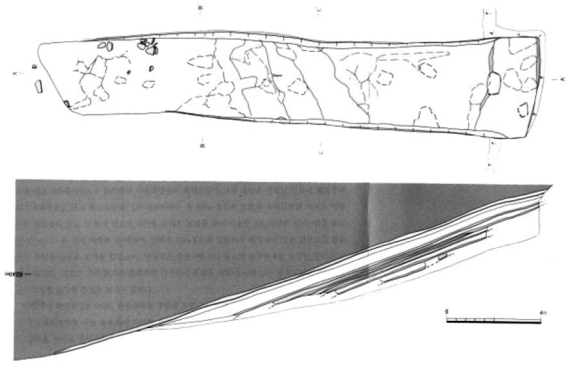
「甕器」では口縁に強度を加えるため、折り曲げるなどして口縁が作られる。報告書では断面情報が省略されている場合が多く、あくまで筆者の実見した範囲に限られるが、口縁はおよそ5型式があり、外に折り曲げてT字状となすa式は堂平窯跡とも共通する。しかしb、c式のように内側に折り曲げる口縁は堂平窯跡には見られない。内側に折り曲げて玉縁状にするd式は堂平窯跡とも共通する。e式は康津・羅州に特徴的な幅広の口唇を作るもので、やはり堂平窯跡には見られず、当該地域と堂平窯跡には違いがある。前述の片口のように、器種と口縁の関係性が堂平窯跡では変化している例もあり、口縁の型式からすれば堂平窯跡は簡略化が進んでいると言えよう。

Ⅳまとめ

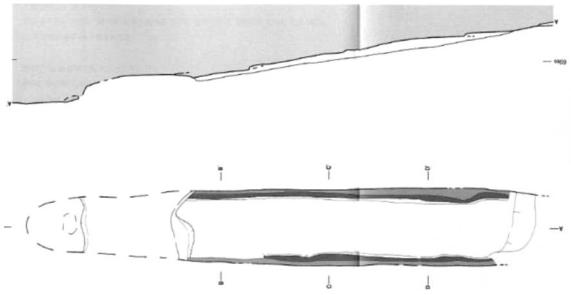
以上の考察により、堂平Ⅰa期の窯道具や製品には朝鮮時代の「甕器」との共通点が多数認められることが言えよう。具体的には堂平窯Ⅰa期の窯道具は、現在のところ貝目のみの使用や焼台の存在からして慶南地方に近しい特色を示す。製品についても、Ⅲ類とⅣ類、蓋、水注は慶南地方に近しい傾向を示す。慶南地方は島津軍をはじめ、すべての日本軍が通過し、倭城などの拠点を構えた地域でもある。従来の伝説で言われる南原に限らず、薩摩の淵源となる可能性を十分に秘めた地域でもあり、今後も注目していく必要がある。ただし、すべての「甕器」窯跡が発掘されたわけではなく、今後、資料の蓄積を待ち、様々な可能性を探っていく必要があろう。

最後に琉球との影響関係について私見を述べておきたい。詳細は渡辺芳郎氏の論考に譲るが、湧田古窯の無釉陶器の製品では、Ⅰ—1類に波状装飾があしらわれるものと瓶、貝目やタタキにかろうじて共通点を見ることができるが、「甕器」に比べてさらに器種が限定され、器壁は厚味を増し、口縁の折り返しも畳み込まずに簡略化されるなど、細部の差が多く認められる。このことは逆説的に朝鮮時代の「甕器」からの直接的な影響というよりも、間接的であると言わざるをえない。つまりは「一六・一官・三官」の伝説のとおりに薩摩を経由して、一度、日本に適応した後の間接的な影響を物語っていると言えよう。

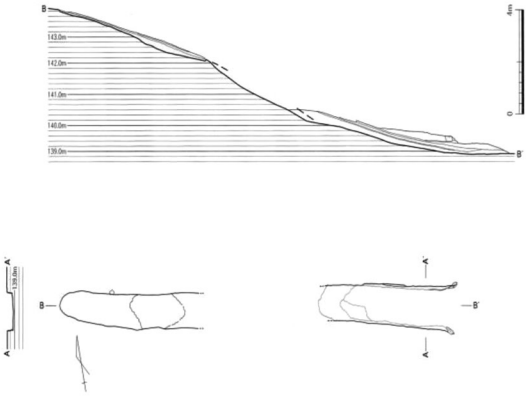
①全南羅州牛山里２号窯跡

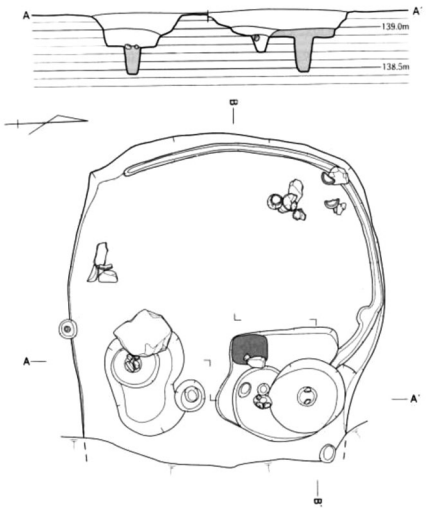


②全南高興郡ソンギ里窯跡

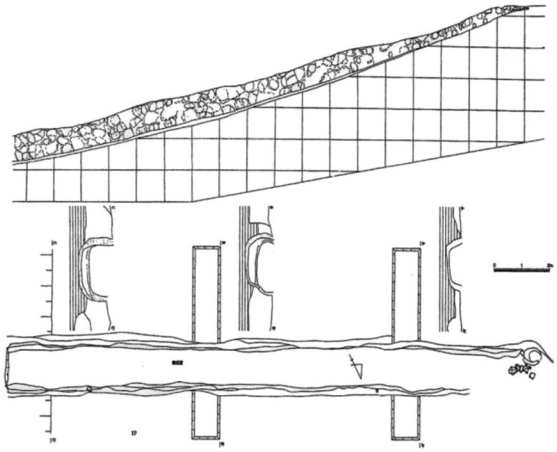


③全南康津月下里窯跡・工房跡





④慶南清道郡蓴池里窯跡



⑤機張下長安里窯跡

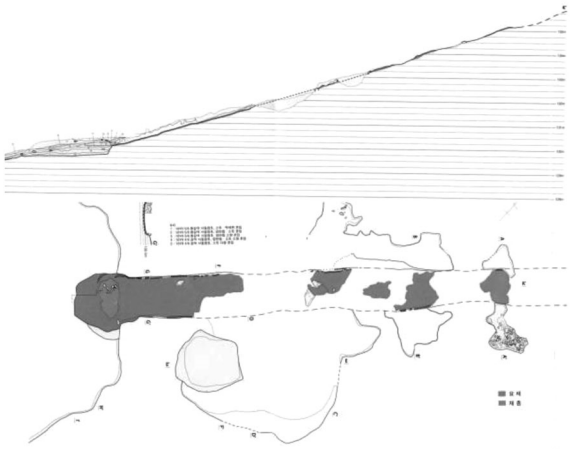


図４　朝鮮前期「甕器」窯体・工房（スケール不同）

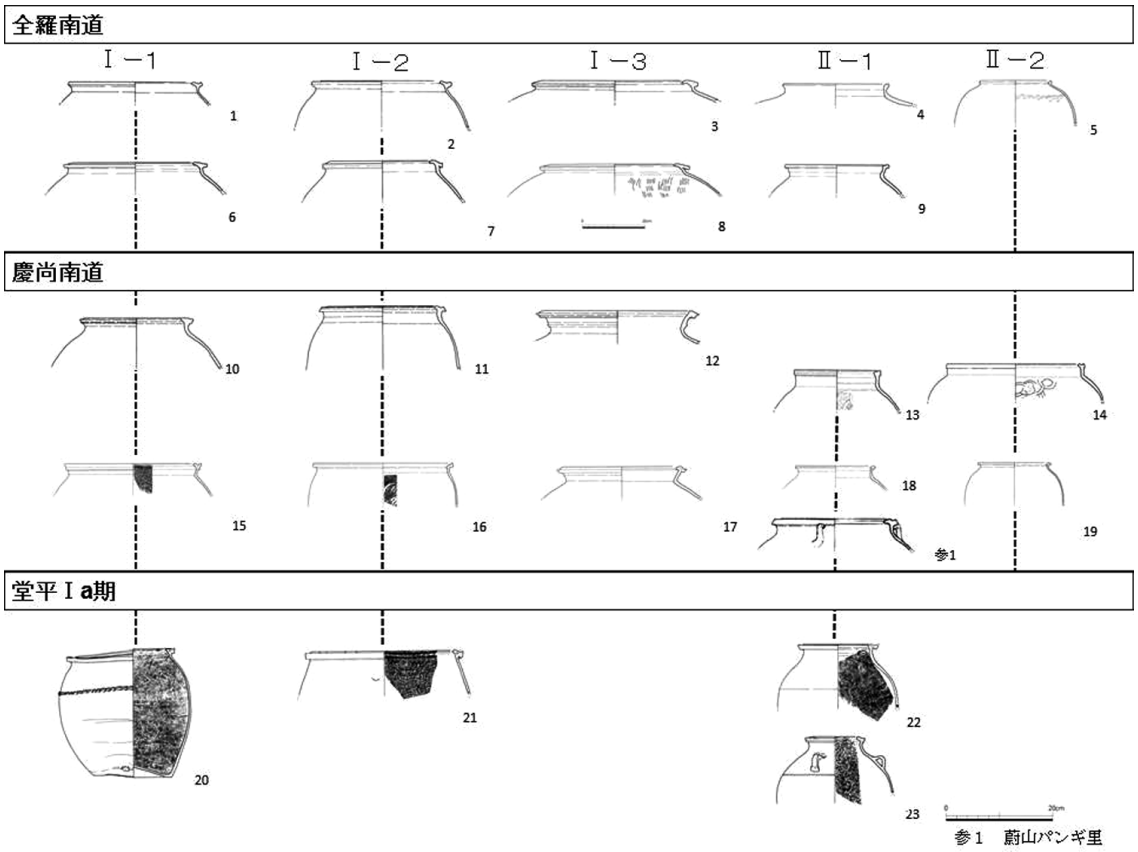


図５－(1)　朝鮮前期「甕器」と堂平窯跡の代表的な器種比較図(1)

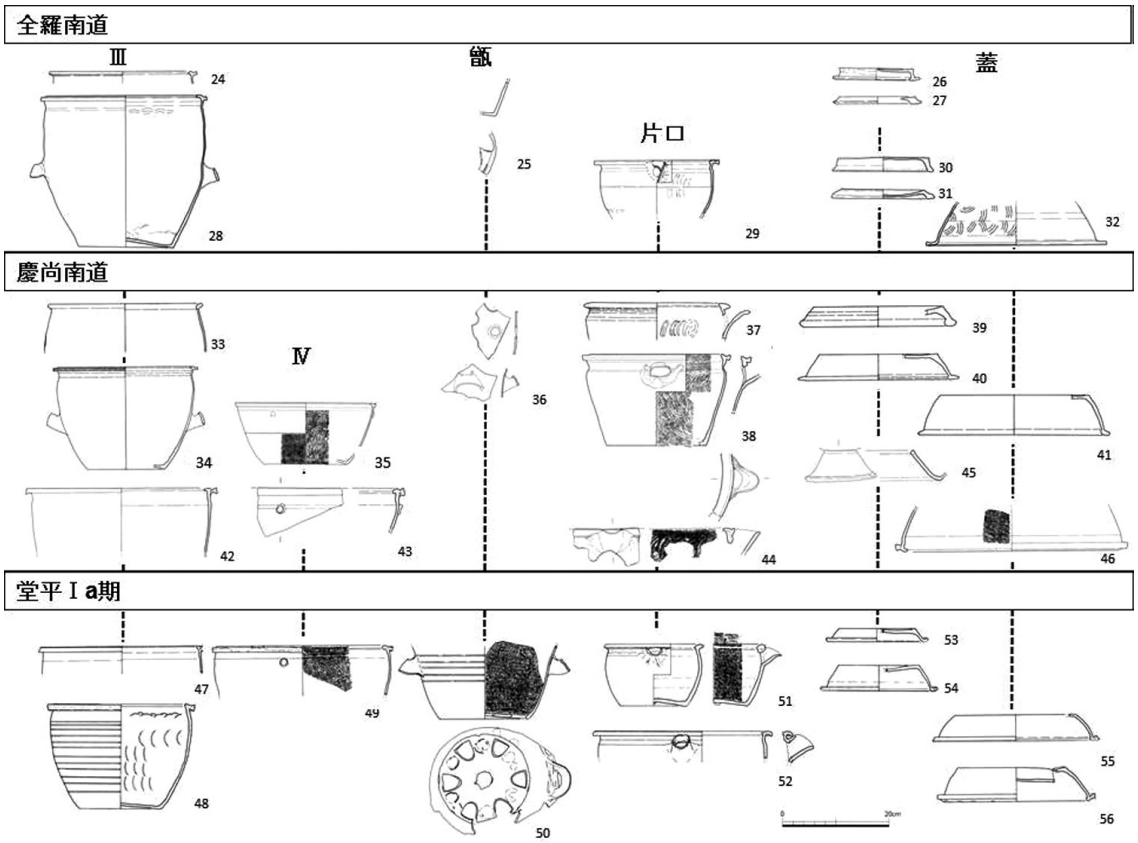


図５－(2)　朝鮮前期「甕器」と堂平窯跡の代表的な器種比較図(2)

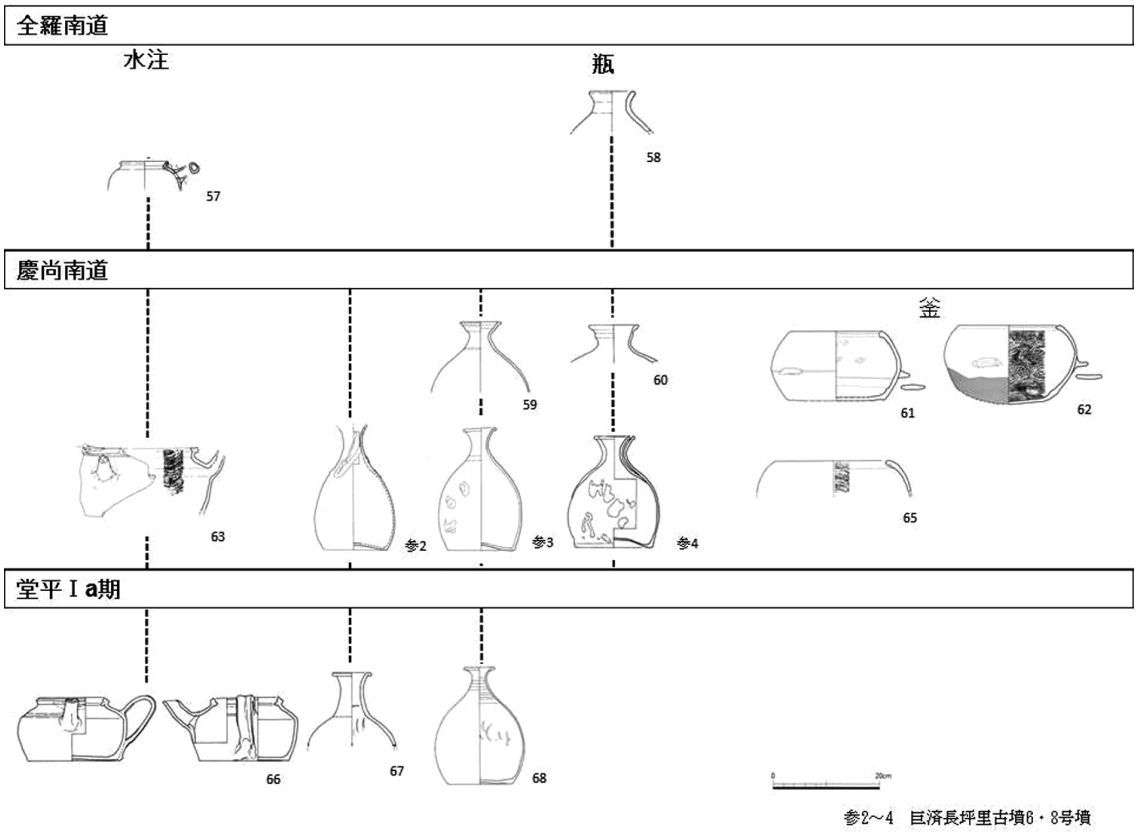


図５－(3)　朝鮮前期「甕器」と堂平窯跡の代表的な器種比較図(3)

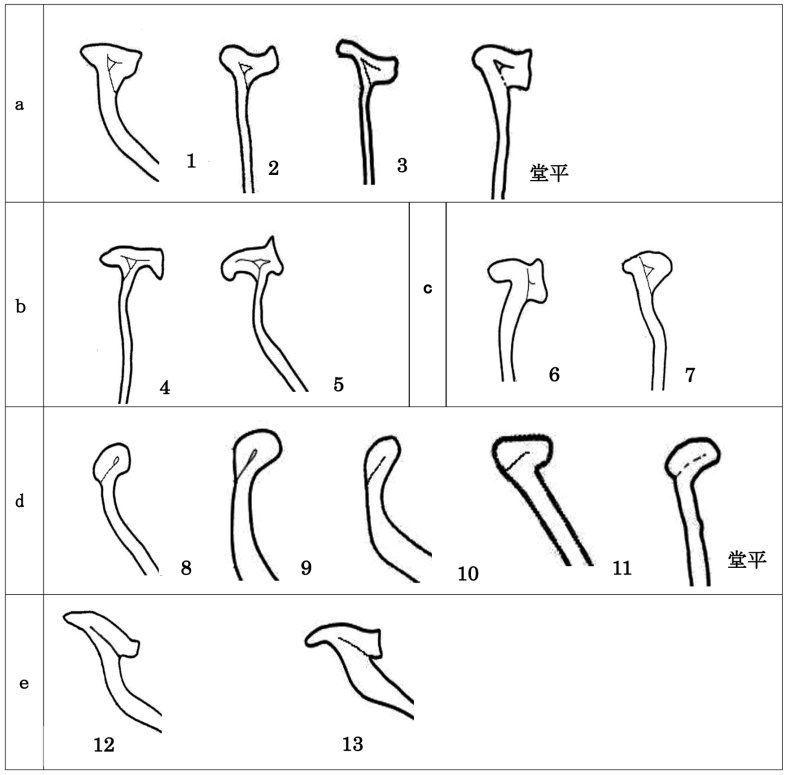


図６　口縁成型方法の比較
1・4・6・8：蓴池里窯跡、3・10・12：牛山里窯跡、5･7･9：牛川里窯跡、11・13：月下里窯跡

i 「経國大典」1467 年頃　工典　工匠

「京工匠　瓮（甕）匠　各給助役二人　本曹 13　奉常寺 10　尚衣院 10　内資寺８　内贍寺８　司導寺８　礼賓寺８　内需司７　昭格署４　司醞署４　義盈庫４　常苑署８　司圃寺 10　養賢庫２　沙器匠　司饔院 380」

ii 梨花女子大学校博物館『제 3 의 전통 , 옹기의 원류를 찾아서 (第三の伝統、甕器の源流を求めて)』2000 年、羅善華「甕器淵源考察」梨花女子大学校博物館　前掲書　7-18 頁、拙稿「朝鮮時代の陶器について」『十六・十七世紀における九州陶磁をめぐる技術交流』九州近世陶磁学会　九州国立博物館誘致推進本部　(2005) 203-226 頁、배보늬 (ペボニ)「朝鮮時代 嶺南地方 甕器에 관한 연구―泗川 牛川里遺跡을 중심으로 -(朝鮮時代嶺南地方甕器に関する研究―泗川 牛川里遺跡を中心に―)」東亜大学校碩士論文　(2006)

iii 拙稿「朝鮮前期　甕器와　日本薩摩의 비교연구 - 堂平窯를 중심으로 -（朝鮮前期甕器と日本薩摩焼の比較研究―堂平窯を中心に―)」『文物』2（釜山：韓国文物研究院　2012）131-174 頁

iv 前掲註 3

v 国立全州博物館『全北의 (の) 朝鮮時代 陶窯址』(1997) 南原市・全州大学校博物館・全州大学校歴史文化研究所『南原陶窯址地表調査報告書』(1999)。なお消費地遺跡出土資料については、窯の確定が難しく割愛した。

vi 湖南文化財研究院『羅州雨山里窯址』(2004)

vii 湖南文化財研究院『康津月下里遺跡』(2009)

viii 南道文化財研究院『고흥 성기리 기와가마 (高興ソンギ里瓦窯)』(2007)

ix 本窯の製品については実見がかなわなかったため、図面を掲載しない。掲載品はごく少量である。

x 慶南大学校博物館『清道 蓴池里 甕器 가마터 (窯跡)』(1994)

xi 釜山博物館『機張　下長安里遺蹟』(2013)

xii 慶南文化財研究院『泗川　牛川里　陶窯址』(2005)

xiii 関明恵・繁昌正幸編『堂平窯跡』(鹿児島県文化財センター、2006)

xiv 고준휘（コ・ジュニ）,「부산지역 자기 (磁器) 가마의 현황과 성격（釜山地域磁器窯の現況と性格)」『釜山도자기 천년의 지혜를 담다（釜山陶磁器　千年の智恵をたたえる)』(釜山：釜山博物館　2014）274-291 頁

xv 대경문화재연구원（大京文化財研究院)『尚州好音里遺蹟』(2007)

xvi 永井正浩「堺環濠都市遺跡における朝鮮王朝陶磁器の需要の推移」『関西近世考古学研究』17（関西近世考古学研究会、2009）67-82 頁

xvii 佐賀県北波多村教育委員会『岸岳古窯跡群Ⅰ―皿屋窯・飯胴甕上窯・皿屋上窯の試掘調査概報―』(2000)

xviii 渡辺芳郎「17 世紀における薩摩製陶技術の琉球陶器への影響」『沖縄考古学会　2016 年度研究発表会　琉球陶器誕生 400 年記念　16 ～ 17 世紀の沖縄における窯業の展開とその背景』(沖縄考古学会、2016）21-34 頁

謝辞　調査にあたっては以下のとおりの方々のお世話になりました。ここに記して厚く感謝を申し上げます。

（日本語はあいうえお順、韓国語はカナダ順）

関　明恵氏、関　一之氏、田代裕一朗氏、松村真希子氏、渡辺芳郎氏、鹿児島県立埋蔵文化財センター、権　赫周氏、金　尹姫氏、慶南文化財研究院、慶南大学校博物館、光州博物館、ペ　ボニ氏、宋　義政氏任　眞娥氏、鄭　義道氏、湖南文化財研究院